

「北方の想像界」からみた「ヌーチミット」と
「アイヌモシリ」

« Nutshimit » et « Aïnu Moshir » dans l’imaginaire
du Nord

河野美奈子
KONO Minako

1. はじめに

ケベック州ではイヌイットと 10 のファースト・ネーションズとメティスが保留地あるいは都市に住んでいる。彼らが文学において広く認知されるには、20 世紀を待たなければならなかった。それはカナダ全体において先住民文学に対する関心が低かったということも一因だが、彼らの多くが文字を持たず、口承により神話や民話を代々子孫へと受け継いでいったため、部族を超えてそれらが広く伝播されなかったこともその理由のひとつとなっている。1970 年代には先住民への政策上の優遇措置の撤廃を盛り込んだ「インディアン白書」が発行され、それに反発する多くの先住民による小説および記事の投稿が相次ぎ、カナダ全体で彼らへの民族的関心が高まった。それはやがて先住民文学への関心へと移り変わっていった。とくに 2000 年代に入ると、先住民文学を積極的に出版するメモワール・ダンクリエ (Mémoire d’encrier) やアネノラク (Hannenorak) 社によりケベックにおける先住民文学は確固たる地位を確立したと言えるだろう。さらに 2021 年にブリティッシュ・コロンビア州のカムループスで先住民の子どものための寄宿学校跡地から多くの骨が見つかったことで、カナダ全体で先住民に対する反省とともに、彼らの文化への注目が改めて高まったのである¹。ケベック州も例外ではなく、先住民に関する多くのイベントが開かれ、2021 年はまさに「先住民文化のルネッサンス」とも言うべき年となった。

そのなか、ケベックでもっとも注目を集めているのがイヌーの作家である²。詩人ジョゼフィーヌ・パコン (Joséphine Bacon)、小説家ナオミ・フォンテーヌ (Naomi Fontaine) はイヌー文学を牽引する存在である。またナオ

ミ・フォンテーヌと同世代のナターシャ・カナペ・フォンテーヌ (Natasha Kanapé Fontaine) はフェミニズム的アプローチを用いて先住民の未来を模索している。さまざまな世代がいるイヌーの作家だが、彼らに共通するのが領土、大地の問題である。彼らは作品のなかでイヌーの人々の大地「ヌーチミット」を描いている。「ヌーチミット」はイヌーの言葉で内陸を意味する。それは実際の大地を指す一方で、作品のなかでは、内的な場所として描かれている。

土地の問題、それはイヌー作家だけのものではないだろう。自然とともに生きてきた民族にとって大地は彼らのアイデンティティと密接に関わるからである。イヌーと同じ北の地に住むアイヌ民族にとっても土地の問題は切っても切り離せないものである。「アイヌの大地」、「アイヌの静かな大地」を意味する「アイヌモシリ」もアイヌ文学にとって重要なテーマである。作家土橋芳美の書いた『痛みのペンリウク——囚われのアイヌ人骨』（土橋、2017、以下『痛みのペンリクウ』）においてもペンリウクが度々これに言及している。

イヌーとアイヌ、2つの民族は物理的には離れているが、両者とも北方の大地に住み、ともにトラウマとも言える苦難の時代を経験し、現在でもその記憶が深く根を下ろしているという共通点がある。

本稿ではイヌー文学における「ヌーチミット」とアイヌ、とくに『痛みのペンリウク』における「アイヌモシリ」に着目し、その多様性を考察した。さらに、北の世界の多様性をダニエル・シャルティエ (Daniel Chartier) の提唱する「北方の想像界」から考え、先住民文学の拡がりについて考察をおこなった。

2. イヌー文学における「ヌーチミット」

イヌー語では大地を指す言葉には、雪に覆われた大地や苔の生えている場所などさまざまなヴァリエーションが存在する。大地の「内陸」をさす「ヌーチミット」はイヌーの人々が生きる場所としても捉えることができるだろう。それは、かつて彼らが家族単位で狩りや漁をしながら移動生活をおこなっていた「ノマド」生活と深く関わるものだからである。

1947年に生まれたバコンは、生まれてから最初の5年間はノマドとして生活をしてきた。そのためバコンにとって「ヌーチミット」は、まず彼女が生活をしてきた実際の場所を指すものとして作品に描かれる。詩集『どこかで』(Bacon, 2018) において「ヌーチミット」で生きるイヌーの生活について次

のように描かれている。

ヌーチミットのどこかで
私は住所のない家にいる。
家の前の通りは荷運びの道
と呼ばれている。
明日、私は川を遡るだろう、
メッセージ棒を探しに。
ヌーチミットのどこかで
大地の偉大さよ。

(Bacon, 2018, pp. 120-121)

イヌーの家族は食料のため、衣服や道具、そして太鼓を作るためにトナカイやヘラジカを求めて何百キロもの道を荷物を運びながら歩いた。彼らは家族単位で森のなかを移動してくるが、ある道具を使って密に連絡を取り合っている。それが「メッセージ棒」である。彼らは道の脇に立てられたメッセージ棒を頼りに、「ヌーチミット」での進む方向を定めたり、ときには自分たちの近況を他のイヌーたちに伝えるためにそれを使ったりしている。広大な大地を移動する彼らは「メッセージ棒」を通して連帯を確認し合い、北の大地で自然とともに生きているのである。バコンにとって「ヌーチミット」とはまず、幼い頃に過ごした地であり、イヌーとしてのアイデンティティのありかとして考えられる。

しかしその後、彼女がある体験をしたことにより「ヌーチミット」は別の意味を帯びることになる。詩集『メッセージ棒』(Bacon, 2009)では「ヌーチミット」はイヌーにとって過去のものとして描かれている。

森のなかにはいるようにと
呼びかけられているようだ
あの場所、大地の内陸の
私たちの大地。
もう長いこと私はソリに乗るイヌーに会っていない。
そう、言われているようだ。

もう長いこと
私は太鼓の音を聞いていない。

そう、言われているようだ。
イヌーの人々は
どこに行ってしまったのだろうか？

私が成長するにつれて伸びていった木々は、
どこに行ってしまったのだろうか？
大地の内陸は空っぽだった。

私は泣き、
短い呼吸で心を
空にする
しっかりと息をするために
しっかりと希望を抱くために
本当の大地
森が私を呼んでいる。
平穏を
みつけるために
私は腰を下ろす。

(Bacon, 2009, pp. 70-73)

現在、イヌーの人々の多くが保留地あるいは都市部に移り住み、ノマドとしての生活をやめてしまっている。それは自主的にというよりは政府の保留地への政策の結果であり、ノマドの生活が現代生活に合わなくなってしまったためである。さらにバコンの世代の子どもたちは強制的に入れられた先住民のための寄宿学校の記憶も大きく影響していると考えられる。学校に入れられた子どもたちは英語またはフランス語を使うことを余儀なくされた。そのため、イヌー語を話せなくなってしまった子どもたちは伝承による祖先の記憶を受けつぐことができず、文化の継承の断絶が起きてしまったのである。バコンの入った学校はイヌー語使用に関しては比較的緩やかだったが、それでもイヌー文化が劣っているものとして教えられることが子どもたちにとってトラウマとなったことは想像に難くない。カヌーに乗ることも太鼓を叩くこともできなくなった彼らは「ヌーチミット」に罪悪感ともいべき感情を抱いていることがこの一節から読み取ることができる。しかしバコンはそこで嘆くだけでは終わらない。

バコンにとって「ヌーチミット」は自身の創作へのインスピレーションを

受ける場となり、イヌーとしてのアイデンティティを確固たるものとするため、そして詩を書くために彼女は「ヌーチミット」に戻り、大地に腰を下ろすのである。

ではノマド生活を知らない世代にとって「ヌーチミット」はどのような意味をもっているのだろうか。

1991年生まれの詩人ナターシャ・カナベ・フォンテーヌは『私の魂に土足で踏み込むな』(Kanapé Fontaine, 2012)において「ヌーチミット」を次のように書いている。

[...]

あなたは自ら私たちの痕跡の
守護者となった。
ヌーチミットよ
あなたが恋しい！

[...]

あなたは私を待っている
私は戻らないだろう。

(Kanapé Fontaine, 2012, p. 48)

「私たちの痕跡」の守護者となった「ヌーチミット」はもはや過去のものとして描かれている。そして「私は戻らない」ということから「ヌーチミット」との精神的隔りがあることが読み取れる。しかし「あなたが恋しい」、「私を待っている」という箇所からは「ヌーチミット」を過去のものとして捨て去ることができない複雑な思いも読み取ることもできる。

同世代の作家ナオミ・フォンテーヌにとっても「ヌーチミット」はまず「祖先の土地」であった。彼女の小説『クエシパン』(Fontaine, 2011)における「ヌーチミット」をみていく。『クエシパン』は小説でありながら登場人物を特定せず、断片形式に書かれた作品である。第3章は「ヌーチミット」と題されており、その冒頭で「ヌーチミット」は以下のように語られる。

ヌーチミット、それは内陸の土地であり、私の祖先の土地である。すべての家族が自分の土地を知っている [...]

ヌーチミット、カリブーの狩人のしきたり。老人たちには欠かせない新鮮な空気 [...]

ヌーチミット、未知の土地だが、精神の休息を求める者にとって敵意のな

い場所。[...]。

ヌーチミット、混乱した人間にとってそれは平穩である。それは彼が切実に求めた内部の場所である。
(Fontaine, 2011, p.63)

保留地で生まれ、そこで育ったフォンテーヌにとって、「ヌーチミット」は自分たちが生きる場所というよりも、まず「祖先の土地」であった。祖先や老人たちには重要な場所ではあるが、彼女が彼らと同じように「ヌーチミット」を眺めているのかという点では、疑問が残る。混乱した人間にとっては切実に求められているものであるが、ナオミ・フォンテーヌにとってはかならずしもすぐそばにある土地としては描かれていないからである。しかし、「ヌーチミット」は過去のものではない。『クエシパン』では「ヌーチミット」へと人々が向かう描写がある。

彼らは列車で行くと言う。彼らはけっして駅へ行くとも鉄道で行くとは言わない。列車で行くとは、とても遠くへ行くという意味だ。ヌーチミットへの長い旅を自分だけのものにしたいという願望なのだ。彼らにとって身近な交通手段であるので、列車で行くのである。
(Fontaine, 2011, p.65)

ここでは「ヌーチミット」は彼らが住んでいる場所ではなく目的地として描かれている。「列車で行く」という表現には、現在は都市生活者であるイヌーの人々が、かつて使用したソリや船ではなく、現代的な手段を用いることで「ヌーチミット」へと向かう姿が表現されている。交通手段の発達で、「列車」で「遠くへ行く」ことが可能になったが、それは同時に短時間で家に帰ることができることも意味しており、あくまで彼らが住む場所は街なのである。「駅へ行くとも鉄道で行く」とも言わないのは、交通システム全体を示すこれらの言葉よりも、個別の体験という点を強調するために個々の「列車」という言葉が用いられていると考えることができる。また「長い旅を自分だけのものにしたい」という思いから、「ヌーチミット」に対する特別な思い、そして祖先の地である「ヌーチミット」と向き合いたいという思いまで伝わってくる箇所である。

若い世代にとって、ノマドとして生活するのはもはや難しくなったが、それでも自身のアイデンティティの根底にはノマドとして生きた祖先の記憶があり、イヌーの大地である「ヌーチミット」を知りたいという思いを読み取り

ることができる。

同じく第3章の「ヌーチミット」の章では、妻を亡くした年老いたイヌーの老人の記憶からみる「ヌーチミット」が描かれる箇所がある。

まるで年月が過ぎ去っていないかのように、あなたはそのことを思い出している。[...] ヌーチミットと呼ばれるその地には、大地の恵みあふれる山々のあいだに湖が点在する。
(Fontaine, 2011, p.78)

記憶の彼方にある「ヌーチミット」は過去にありながらもあたかも現前しているかのように老人の目には映っている。「ヌーチミット」での生活を知らない若い世代の作家たちにとって「ヌーチミット」は過去のものでありながら、イヌーのアイデンティティには必要不可欠であり、「ヌーチミット」をふたたび見つけ出すことが重要であると『クエシパン』から読み取ることができるのではないだろうか。そのとき「ヌーチミット」は物質的な土地であると同時に、作品においての内的な場所として描かれているのである。

この土地に対する考えはアイヌ民族における「アイヌモシリ」とも共通点を見出すことができるだろう。次に『痛みのペンリウク』からみる「アイヌモシリ」へと移る。

3. 『痛みのペンリウク』からみる「アイヌモシリ」

『痛みのペンリウク』が書かれたきっかけは、2016年に著者の土橋芳美が北海道文化センターの文章教室にて受講生の1人から先祖のペンリウクの骨が北海道大学に保管されていることを教えられたことである³。著者はペンリウクの骨が持ち去られ、本来眠るべき場所がないことに思い悩むことになる。いつしか著者にペンリウクの声が聞こえるようになり、彼女はペンリウクの物語を書くことになった。本書はペンリウクが自身が生きていた時代と現在を行き来し、著者である子孫の土橋に語りかける形式になっており、序文を書いた作家花崎皋平も書いているように、1人のアイヌ民族の長老が語る一大叙事詩の様相を呈している。そこに著者土橋の声、そして北海道大学の調査資料や遺骨返還のための往復書簡が織り込まれている。

本書のなかでアイヌの大地「アイヌモシリ」は以下のように書かれている。

[...]

カムイから
借りているこの大地を
できるだけ汚さず
次の世代に渡していく
それでいいと
わしらは思っておった

そのアイヌモシリ（アイヌの静かな大地）に
ひとり
ふたりと
シャモ（和人）が
来るようになってきたな
[...]

（土橋、2017、p.17）

土地はアイヌのものではなく、アイヌの神、精霊であるカムイからの借りものであると考えるアイヌの人々と、土地を開墾し、所有するという認識でやってきた和人とのあいだには土地に対する決定的な考え方の相違があった。「できるだけ汚さず」自然のままに暮らすことを良しとする考えのアイヌ民族と厳しい北海道の自然を克服しようとする和人との関係はその後の歴史を知っている読者である我々には不安を掻き立てる一場面となっている。

土地を所有し領土化することは閉鎖的な空間を構築することにつながるのならば、『痛みペンリウク』では「アイヌモシリ」はあらゆるものに開放されているように描かれている。それは和人に対しても同様であるが、何よりもアイヌの文化を尊重する者に対して開かれているのである。ペンリウクは宣教師ジョン・バチラー（John Batchelor）が「アイヌモシリ」にやってきたことを以下のように讃えている。

天から遣わされた
アイヌモシリへの
神の使い
それがジョン・バチラーであった

（土橋、2017、p.43）

バチラーは聖公会の宣教師でアイヌ民族へのキリスト教布教のために19世紀の終わりにベンリウクの住む平取（ピラトリ）を訪れ、彼と親交を深めた。アイヌが神と崇めるカムイとキリスト教とでは信仰の対象が異なるが、それでもバチラーを神の使いとしたのは、彼がアイヌ語を学び、アイヌの人々を尊敬し、文化を尊重したからにほかならないだろう。アイヌ民族のことを理解しようとするのであれば、たとえ遠くから来ようと異なる精神世界を持っていようと構わない。認めたものすべてを「アイヌモシリ」に受け入れようとするダイナミックさがアイヌの精神世界にはあるとみることができる。

『痛みをベンリウク』では、ベンリウクは「アイヌモシリ」について語っているが、現代に生きる「芳美」は「アイヌモシリ」という言葉を使わない。それは現代のイヌーの作家が「ヌーチミット」を語るときの戸惑いに近い思いを「芳美」が「アイヌモシリ」に対して抱いているからではないだろうか。「芳美」にとって「アイヌモシリ」とはアイヌの住む大地という意味であるとともに、先祖ベンリウクの遺骨が故郷平取に帰り、その地で眠るときに初めて彼女の前に現れるものと考えられる。

その一瞬を北海道大学でのベンリウクの遺骨と「芳美」の対面で垣間みることができる。

「時間が
ぼんと
一一三年前に戻ったのか
あなたの
遺骨が
私の目の前に置かれた

私は時間が止まったように
動けない
どんな
言葉も
浮かばない
しかし
涙でかすむ
あなたの遺骨は

ゆらいではない

悲しみでもなく
怒りでもなく
諦念でもない
ただ黙した
静かさのみがあつて
私の折れた心から
溢れた血と
怒りと
哀しみを
ただ
見つめてくる
眼窩のくぼみ

長い歲月ゆえに
風化したのだろうか
もっと怒りに満ちていると
勝手に考えていた
ただ
静まって
静まっている

波立っていた
私の心が静まり
温もっていく
ふしぎ
ペンリウクさん
あなたを
かならず
ピラトリの
土に戻しますから」

(土橋、2017、pp.65-68)

同意なしに持ち去られた祖先ペンリウクの骨を前にして、ペンリウクの怒りや悲しみを読み取ろうとした「芳美」だったが、彼の骨が語るのは静けさであった。そしてその静けさと対峙したことにより「芳美」自身の怒りや悲しみが「癒やされ」、彼の遺骨をかならず故郷に戻そうと決意を新たにする場面である。理不尽な行いで植え付けられたトラウマは、イヌーにとっては土地を奪われ保留地に住まわされたこと、そして寄宿学校に強制的に入れられたことである。アイヌにとってそれは土地を奪われ、強制的に日本人にさせられたこと、そして続く差別によってさらに傷つけられたことだった。自らの尊厳を取り戻すためにイヌー作家にとっても、アイヌ作家にとっても土地との関係が重要であった。そしてそれは実際の土地だけではなく精神的な場所として作品のなかでも描かれることになる。その場所は「ヌーチミット」であっても「アイヌモシリ」であっても、過去の記憶があり、そこから未来をみることができる場所でなくてはならないのである。

しかし、イヌーとアイヌは同じ精神世界にいるということだけではなく、北方の民族の複雑さと多様性をもう一度考える必要があるだろう。ダニエル・シャルティエは北の世界を「北方の想像界」と呼び、多くの人々がもつ固定観念に囚われた北方世界の危険性に警鐘を鳴らした上で、多様な北方の世界を提示している。

その「彼方」とは、北極地方が始まる場所であり、ヨーロッパのエクメーネ〔地球上で人類が居住しようと考えられる地域〕の果て、未知で、空っぽで、人の住まない遠い「自然の」世界のほうに開かれた場所、すなわち北極圏のことである。これらの表象は1つの記号体系を形成しており、それをここでは簡便に「北方の想像界」と呼んでおく。
(Chartier, 2018, p. 10)

多くの読者は北の世界を単一のものと捉えてしまい、このような「北方の想像界」を形成してしまう危険性をはらんでいる。それに対して、シャルティエが提唱する「北方の想像界」では、寒くて、白く、厳しいだけの世界という考えを捨て、北の世界にも町や季節、四季があり多面的であるという考えから出発するべきであると考えられている。既成の概念を取り払い、単色の世界とみなされていた北方の世界を複雑化することで北を描く文学はより多彩な世界を我々に提示するだろう。カナダにおいても日本においても先住民作家が注目されている昨今、文化、歴史そして大地を含む自然と彼らの描く

北方の世界の複雑さを我々は注意深く読み解く必要がある。

4. おわりに

北方の世界を多彩で多様な世界と捉えることで、北方の世界はよりダイナミックな様相を呈することが可能になる。この考えから出発し、文学を通じたイヌーの「ヌーチミット」やアイヌの「アイヌモシリ」を考えると、単に自然に満たされた土地を意味するのではなく、それぞれの土地がそれぞれの民族にとって過去であり、未来であり、トラウマでもあり、癒やしの場でもあると考えることができる。また生活様式が多様になった現在では作家と土地との距離は遠ざかったりまた接近したりとつねに変容しているとみることもできる。祖先たちがかつて営んでいたような生活ができなくなっている、作家にとってインスピレーションの源は彼ら固有の土地にあり、作家たちは何度も立ち戻りながら土地そして自らのアイデンティティと向き合っているのである。

(この みなこ 立教大学)

注

- 1 子どもたちは、劣悪な環境や虐待により亡くなったと考えられている。問題はさらに膨らみ、各地で寄宿学校の設立に関わった人物の像がなぎ倒されるという騒動にまで発展した。寄宿学校はキリスト教団が運営をしていたため、2022年7月ローマ教皇がカナダに赴き、寄宿学校から生き延びた人々を前にして謝罪をおこなった。Radio Canada「ローマ教皇、寄宿学校の犠牲者とサバイバーに再度謝罪」2022年7月26日 <https://ici.radio-canada.ca/espaces-autochtones/1900753/visite-papale-edmonton-maskwacis-autochtones-reconciliation> (最終閲覧日 2024年5月7日)
- 2 カナダの先住民は1982年憲法により3つの集団に分類されている。イヌイト、メティス、ファースト・ネーションズである。イヌーはケベック州では3番目に人口の多いファースト・ネーションズである。
- 3 「研究のため」という名目のもと遺骨の収集は明治期の1874年から始まり1944年までおこなわれた。現在、個体ごとに特定できた遺骨だけを計数しても1574体の遺骨が12の大学で保管されている。文部科学省「大学等におけるアイヌの人々の遺骨の保管状況の再調査結果」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/25/1376459_4_1.pdf (最終閲覧日 2024年1月8日)

参考文献

BACON, Joséphine (2009) *Bâtons à message*, Mémoire d'encrier.

BACON, Joséphine (2018) *Quelque part*, Mémoire d'encrier.

CHARTIER, Daniel (2018) *Qu'est-ce que l'imaginaire du Nord ? Principes éthiques*,
Rovaniemi, Arctic Arts Summit, Imaginaire | Nord. (シャルティエ、ダニエル著、
小倉和子・河野美奈子訳 (2019) 『北方の想像界とは何か？理論上の原則』)

土橋芳美 (2017) 『痛みのパンリウク——囚われのアイヌ人骨』草風館。

FONTAINE, Naomi (2011) *Kuessipan*, Mémoire d'encrier.

KANAPÉ FONTAINE, Natasha (2012) *N'entre pas dans mon âme avec tes chaussures*,
Mémoire d'encrier.